世田谷村日記

石山修武

十月十九日

八時半河野鉄骨来。工事始める。キチンと段取り通りすすめているのが見事。オヤジの力だろう。今日は遅くまで研究室に居るつもり。雨が降り始め、九時過養生を済ませ、河野チーム帰る。又、台風が二つも来るようだ。何とも言い難いこの台風の来かたはほとんど天変地異じゃないか。世田谷村で暮らしていると実に生活感情の起伏が天候と同調しやすいのを知る。十時半より研究室で雑用。十五時馬場さん来室。十九時迄、細かい打合わせ連続。二十一時過研究室発。雨の中を新大久保まで歩いて帰る。

十月二〇日

「有名・無名」

昨日工作社より「室内」連載ゲラの最終稿が送られてきた。「人相は終のデザインか」と題した今回の原稿はともかく、川合健二、ミース・ファン・デル・ローエの顔写真のセレクトが良くて、書いた文章が引立っていた。長い連載で初めての事であったような気がする。昔、十数年に渡って「現代の職人」と題する連載をした。藤塚光政の写真とのコンビネーションだった。藤塚の写真は毎回とても良かったが、今回のような事は無かった。今回も川合健二の写真は藤塚のものであったが、ミースのモノは良く見る有名なものだった。誰の写真か失念した。

何故良いと思ったのだろうと考える。建築・デザインの世界ではミース・ファン・デル・ローエは有名である。歴史上の人物だ。対するに川合は全くの無名とは言えぬが、ミース程には有名ではない。その有名、無名が見開きのページの左右に並んだのが良かったのではあるまいか。それだけで読者は何かしらのドラマを感じ取る。人物写真はその人物が有名であればある程に大小の歴史性を帯びている。つまり、様々な物語を背負っている。例えばミースであれば第三世代のバウハウスの校長であった事。その後第二次世界大戦に際し、ナチズムの台頭によりアメリカに亡命した事。等々。世界史的な背景を思わせる迄のものがある。人物写真一葉でそれを思わせる事ができる。それ故に、それと並べた川合の写真は、オヤ誰なんだコレワと言う事になり、そこに自然にドラマが生まれてしまうのだ。面白い発見であった。もっとも、ミース・ファン・デル・ローエを知らぬ人は多いだろう。今の日本では安藤忠雄の方が良く知られているに違いない。「室内」の読者の知的階層が奈辺にあるかを私は知らぬが、マ、そんなところだろう。しかし、ミースと安藤忠雄を並べるドラマよりはミースと川合を並べて見せる芝居のほうがはるかに上等のエッセンスを持つだろう事は言える。つまり、有名の内実には諸々の多様がある。今をときめくタレントや女の裸も又、物を言うけれど、それは歴史にならぬ事が多い。人物写真の力は、要するにその人物の歴史性に尽きる。

ところで、藤塚光政の写真はともかく、藤塚自身の人相写真は余り知られていない。「室内」連載は新編集長山本伊吾の方針で、ほとんど全てを切り換えるという荒事になるらしい。私が山本伊吾だったら、やはり同じ事をするだろうと思うから、この試みは良いと思う。誰が父親の引いたレールの上をトロッコですべるだけを望むだろうか。で、私の連載も終了という事になった。それ

で最終回は藤塚光政の事を書いて終わりにしたい。今日、「室内」に連絡して、その旨伝え、藤塚の資料を送ってもらおう。藤塚の人相と、誰の人相を並べるかが考えどころである。

十三時新大久保駅前のソバ屋近江屋で藤塚光政と昼食。このソバ屋は駅前ソバ屋なのだが、故佐藤健に教えてもらっただけであって、烏山の宗柳と並ぶ、仲々のすぐれソバ屋なのである。ダッタンソバがすごかったのだが、今はない。アレを喰いたいために新大久保にまで遠くから来ていた人々を近江屋は捨てたのだけれどそれは時代の流れで仕方がない。本当にここは駅前ソバ屋としては日本一なのである、今のところは。そこで藤塚と久し振りにビールを飲んだ。藤塚も少し年を取ってそれなりに大人になっている。大人といったって、彼はすでに六十四才来年からは、誰はばかることない老人なのだ。又、色々とめどなく話したが、すぐれた写真家には、もともと思考のフレームは無いのだから、藤塚は本来写真家の中では一番芸術家なんだけれど、私の友人でもある宮本隆司やなんだらかんたらの非芸術家振りとは異るのだけれど、芸術家特有の恥らいがシティボーイのバカさ加減とあいまってありすぎだよね。藤塚は自分の中の芸術家をそろそろ自覚しなければいけない。宮本隆司は、商業写真家の凄さに思いをはせなければいけないような気がする。